報告記事

第72回通常総会
第113回講演大会

昭和62年4月2日第72回通常総会，名誉会員推挙式，表彰式，特別講演会が，また4月1日，2日，3日の3日間第113回講演大会が東京大学工学部，法学部（東京都文京区本郷）で開催された．

第72回通常総会

第72回通常総会は久松会長が議長となり，木下本会専務理事司会のもと，4月2日9時より東京大学法文二号館31番教室で開催された．冒頭に久松会長の挨拶が行われた．

本日ここに社団法人日本鉄鋼協会，第72回通常総会を開催いたしましたところ，諸先輩をはじめ多数会員のご出席をいただき厚く御礼申し上げます．

また恒例により昨日から3日間の会期で，第113回春季講演大会を開催しておりますが，開催に先立ちまして東京大学関係各位の格別なご好意によりまして，工学部および法学部等広範囲にわたる施設をお借りすることができました．このこと，まことに有難く厚く御礼申し上げます．つきましては本会にふさわしい学術講演大会であり，会員各位にとつて有意義であるよう願つております．

今大会の特色を一言で申し上げますと，大幅なコストダウンに結びつく可能性のある新製錬法，新製品の開発研究等の講演発表が多数ございます．例をあげれば，溶融還元法，転炉における機能の拡大，新しい連鋳技術，フラッド材，缶用材料，自動車用表面処理鋼板に関する論文等であります．また萌芽境界領域としては，構造用セラミックスを初めて採り上げましたところ，二十件の発表が申し込まれております．

講演発表数は，前年に比べ多少減少しておりますが，内容は充実しており会員にとりましては，有益なものが多いと存じております．

私が昨年会長に就任して以来，早くも一年を経過いたしました．この間石原重利前会長から申し送られましたことを，常に念頭におきながら諸事業の運営にあたつてまいりました．

本協会の事業につきましては，後刻，栗田満信理事からご報告があるところでありますが，いずれも諸事業は関係理事をはじめ委員各位のご努力により，順調に運営されているものと存じます．さて，本邦鉄鋼業界の非常のときに当たり今後の協会運営については大いなる検討を必要といたしましよう．そこで昭和61年度には，白松爾郎副会長を委員長とする「臨時協会事業検討委員会」を設置いたしました．委員会には三つのグループを設け，田中良平会員を主査とする第一部会，河野拓夫会員を主査とする第二部会，大橋延夫会員を主査とする総合WGに業務を分担，精力的に調査していただきました．調査項目は，協会活動範囲，事業規模，事務局のあり方等でありました．明日開催予定の理事会において最終報告書を頂戴することになつておりますのでこの報告書を慎重に受け止め，できる限り答申にお応えする所存であります．

当協会は創立以来70有余年，春秋の講演大会をはじめ各種特別講演会，共同研究会をはじめとする研究活動，講座・セミナーなどによる教育事業，多岐にわたる出版・情報活動，さらに国際会議を主催し各国との交流事業に多くの実績を残し，また工業標準化についてもISOの幹事国業務も引き受けてきました．このように本協会の事業範囲はきわめて広く精緻にわたつているだけでなく，これらの活動により会員の親睦が深められ，「共同研究会」という，最新技術の発表と討論，工場現場・研究所の見学も許す限り自由に行われるという場があつて，そのことの成果は極めて大きく，鉄鋼技術の発展に寄与したとおもいます．このように本会の特長は学会・業界を通じての解放的交流活動にあるといえます．

さて昨今の急激な環境変化に対応すべく鉄鋼各企業はその対策に大わらわであります．当面各企業は鉄鋼事業規模を縮小合理化し，多面化を目指して各種新事業への展開を急いでおります．これは当然のことであります．しかし企業の変身と学会である「日本鉄鋼協会」の変わり方とにはおのずと差がありましよう．この中心課題については，前述のように，「臨時協会事業検討委員会」の答申を尊重しつつ当面の協会のあり方，端的には，協会活動の範囲を早急に打ち出したく考えております．

欧米の河川水運依存の鉄鋼業を，臨海巨大製鉄所方式で圧倒したわが国スチール・インダストリーがその事業規模を縮小せざる得ない事態に今到達しました．これは背景に「飽和」という現象をもつ製造業の宿命でもありましよう．しかし私からみると，従来のスチール・インダストリーは規模を縮小せざるを得ないとしても，スメルティングにより大規模に，エレメンタル・アイロンを製造し得るようになつた，転炉製鋼周辺のリファイニング技術の進歩発展をみると，構造材料用の旧鋼材料の他に，機能材料としての「アイロンとその合金」という新素材産業の非常に明るい未来が今やつと開かれつつあるやにおもわれます．地球とその衛星である月とは鉄の「球」であります．協会はもちろん，守るために打つて出ますから，現在以上に「萌芽境界領域」他へ範囲を拡大するものと思つておりますが，「鉄と鋼」の学問から「鉄及びその合金」の学問へと変わることだけでも興味はつきないことを若い人々に知つてもらうことが重要なことと思考いたします．

本日，この総会の後の名誉会員推挙式において石原重利殿，井上道雄殿，盛　利貞殿，フレミングス殿の4名の方々を本会名誉会員に推挙申し上げることになつております．

また，渡辺義介賞，西山賞をはじめ各賞の表彰式が行われますが，新名誉会員ならびに，受賞者のご業績に対しまして心から敬意を表しお祝い申し上げますと共に，今後一層のご研鑽を願うものであります．

会員各位におかれましても，ますますご研鑽を願うとともに，日本鉄鋼協会も渾身の努力を傾注いたしますので，一層のご支援をお願いするしだいでございます．

以上挨拶が行われた後，総会の議事に入つた．付議された議案は次のとおりである．

第 72 回通常総会において挨拶される久松会長

議案第 1 号　昭和 61 年度事業報告，収支決算ならびに財産目録の件

議案第 2 号　昭和 62 年度事業計画ならびに収支予算の件

議案第 3 号　理事，監事ならびに評議員選挙の件

初めに議事進行上，議案第 3 号から始められた．選挙管理委員に島田仁君，伊藤庸君を選び投票が行われ，別室において開票に入つた．続いて議案第 1 号ならびに第 2 号が関連しているので一括議題として付され，これを事業と会計に分け，事業については栗田満信理事，会計については岡雄彦理事からそれぞれ報告ならびに提案がなされた．

「昭和 61 年度事業報告ならびに昭和 62 年度事業計画」

（特記事項）

まず，臨時協会事業検討委員会の活動につきましては，先刻，久松会長のご挨拶にありましたので省略させていただきます．

1　春秋の講演大会は，春は東京，秋は名古屋で開催し発表件数は討論会を含め合計 1 712 件でありまして，過去最高数を記録いたしました．昭和 60 年度から萌芽境界部門を採り入れましたが，この分野ではチタン，複合材料，粉末急冷金属等 185 件の発表が含まれております．

また，昭和 62 年度の講演大会は春は昨日から 3 日間東大で開催し，秋は熊本で行われます．昨日からの講演発表数は討論会を含め 780 件であり，昨年の春に比べますと約 40 件減少してはおりますが，構造用セラミックスの講演が 20 件発表されるなど，内容は充実しております．

2　本会の定期刊行物を除く各種図書出版物の充実を目的として 12 月に図書出版委員会を発足いたしました．

昭和 61 年度は，従来の出版分科会にて「設備診断技術ハンドブック」「画像処理による材料組織解析の現状」ほか 3 点発行いたしました．

昭和 62 年度は図書出版委員会のもとで「コールドストリップ報告書」「鉄鋼の海洋破面写真集」「センサー報告書」「会員名簿」等の発行を予定しております．

3　昭和 60 年度に提言されました産学連携強化につきましては本年度に大学，国公立研究機関および維持会員等の研究が，いかなる方向を指向しているかを広く一般に知らせるため，研究テーマを公募いたし，98 件の応募がありましたので会誌「鉄と鋼」9 月号に公開いたしました．この内 5 件は，本会の特定基礎研究会の単独研究とし，なお，1 件は，大規模研究として金属系材料研究開発センターへ検討を依頼しました．

4　昭和 60 年度から萌芽境界部門の講演を採り入れましたが，チタン材料に関する共同研究を推進する気運が生じましたので，昭和 61 年度から「チタン材料研究会」を新設いたしました．

5　昭和 60 年度に発足した国際交流委員会は，本年度から活発な活動に入り昭和 61 年度には日本—ノルディックシンポジウムを開催し，昭和 62 年度計画といたしましては，日本—チェコ，日本—ドイツ，日本—中国とのシンポジウムを，また昭和 65 年度までの国際会議といたしましては，加工熱処理，をはじめ資料にありますように 5 つの国際会議の開催を決定いたしました．

（会　誌）

昭和 61 年度の和文会誌「鉄と鋼」は今年も多数の研究論文を掲載するとともに技術資料，解説等，会員の意向を反映した啓蒙記事の充実を図りました．

発行冊数は，講演概要集四冊とし，普通号 10 冊及び「チタンおよびチタン合金」「表面処理」の特集号各 1 冊計 16 冊を発行いたしました．

また，欧文誌「Trans. ISIJ」は，国内の優れた研究論文のほか，春秋の講演大会の概要，わが国で開発された鉄鋼設備，製品等を 12 冊に分け掲載するなど一層の充実に努めました．

昭和 62 年度の「鉄と鋼」は「製銑特集号」を含め 16 冊発行致します．

「Trans. ISIJ」は特集号として「超塑性」，「急冷凝固」等を取り上げますほか普通号併せて 12 冊の発行を予定しております．

（技術講座）

昭和 61 年度の西山記念技術講座は，「鋼管の製造技術の現状と将来」他 2 テーマにより東京，大阪で計 6 回開催され，白石記念講座は，「電子材料の製造技術」と「軽合金の製造・利用技術の最近の動向」のタイトルを取り上げいずれも好評を得ました．

昭和 62 年度も西山記念技術講座は「ステンレス鋼製造技術の最近の進歩」他 2 テーマ，白石記念技術講座は「金属系新素材の開発と応用」ほか 1 テーマを予定しております．

（調査研究事業）

共同研究会は鉄鋼技術全般にわたり現場的な立場からの

研究と情報交流を昭和60年度に新設した「亜鉛めつき鋼板部会」を含め19部会14分科会の構成により行つております.

特定基礎研究会は鉄鋼業界からの要望課題について基礎的な研究を行つておりましたが,「鋼材の表面物性に関する「基礎研究部会」が,終了いたしました.従いまして,昭和62年度は「石炭の炭化反応機構部会」「画像解析による材料評価部会」「電磁気冶金の基礎研究部会」「鉄鋼材料の相界面・結晶粒界の設計と制御部会」の4部会が活動いたします.

また,本会と日本金属学会,日本学術振興会3者にて組織しております鉄鋼基礎共同研究会は昭和61年度に「鉄鋼の環境強度部会」が終了しましたので昭和62年度は「高純度鋼部会」「鋼の急速凝固部会」「界面移動現象部会」「結晶粒超微細化部会」の4部会が活動いたしております.

標準化委員会はJIS原案の作成,鋼材特性に関する各種データシートの作成,ISO規格の日本側意見のとりまとめ等幅広い活動を行つております.

鉄鋼標準試料委員会は化学分析用,機器分析用等標準試料を製造頒布し,国内外の鉄鋼分析技術の向上に努めております.

次に従来から特別会計を設けて研究してまいりました高級ラインパイプ研究会は,予定の実験を終了いたしました.しかし3年程度のデータ処理,海外の機関との接渉が必要となり,昭和62年度から一般事業として高級ラインパイプ研究会を設置いたしました.

また,本会創立70周年記念事業の一環として「学生の製鉄所および研究所見学会」を実施いたしましたが,第3回見学会は昭和63年3月に行う予定でございます.

次に鉄鋼技術情報活動でございますが,従来どおり金属関係文献を抄録し検索システムへの入力作業を行うとともに端末機によるシステムの利用と普及に努めております.

ISO/TC17幹事国業務につきましては昨年5月第11回SC1国際会議をローマで開催し,ほぼISO事務局の希望した成果を挙げることができました.

最後に会員数についてふれたいと存じます.
昭和60年度までは毎年100名ないし150名程度の増加がみられましたが,残念ながら昭和61年度は353名の減少となりました.

会員各位には,お互いに我々の学会であるとの認識を深められ会員数の増加にご協力いただきたく存じます.

「昭和61年度会計報告および昭和62年度収支予算」

(決算)

まず一般会計決算の結果,収入は9億3787万5026円となりました.これは予算に対し約306万円の減収であります.本年度は,刊行事業,講演大会研修事業,鉄鋼標準試料等の収入で約1175万円の増収はありましたが,会費,技術情報,繰入金収入等で約1480万円の減収となり,その結果予算に対し約306万円の減収となりました.

一方,支出の部におきましての決算の結果は,極力節約に努めましたので,予算に対し約6060万円支出の減となり支出総額は,8億8033万8350円となりました.

この結果当期剰余金5753万6676円をもつて昭和61年度を終了いたしました.

(剰余金処分)
次に剰余金につきましては,その全額すなわち5753万6676円を次年度に繰越し,昭和62年度財政を充実いたしたく提案します.

(財産目録)
なお,決算の結果,昭和61年度末現在の一般会計保有の純財産は,3億3085万9943円でございます.

(別途資金会計)
別途資金会計は表彰ならびに事業資金ほか17の会計を保有しており,それぞれの目的に応じた事業を行い特別資金運営委員会,理事会の議を経て支出し,または蓄積されておりまして,収支決算および期末保有の財産は資料に示すとおりでございます.

(補助金事業等会計)
補助金事業等会計は13の特別会計を有し,補助金,委託金あるいは他団体の分担金等により運営しておりまして,ISO幹事国業務会計,高級ラインパイプ研究会計をはじめ,いずれも充実した事業を行つております.

(予　算)

(一般会計)
まず一般会計でございますが,昭和62年度もたいへん厳しい予算編成方針のもとに編成いたしました.収入の部では,前期繰越金を含め総額9億628万9676円を計上いたしました.これは前年度に対し約3464万円の減額予算でございます.

一方,支出の部におきましては,刊行事業では,和文会誌を本年度も16冊,欧文会誌12冊,特別報告書などの発行費を計上いたしました.

また,調査研究事業につきましては,事業報告にもありましたように,新部会の新設はありますが,そのほかは,おおむね継続事業でございまして,内容の充実に重点をおき,極力節約を図りました.

(別途資金会計)
別途資金会計の予算は例年どおり特別資金運営委員会および理事会の議を経て事業計画をもとに編成いたしました.
創立70周年を記念して,実施いたしました理工学系学生の研究所,製鉄所見学会は昭和63年3月に行うこととして準備費のみ予算化してございます.

(補助金事業等会計)
本年度は大方継続事業でございまして,ISO幹事国業務を含め11の研究会計等を予算化いたしております.
先刻事業報告にもありましたが,高級ラインパイプ研究会では実管試験が終了しておりまして,報告会等を残すのみとなりました.

最後に,本年度も予算の執行には細心の注意をもつて運営いたしますので,会員各位におかれましては,一層のご協力を賜りたくお願い申し上げます.

以上議案説明の後，濤崎忍監事より監査報告がなされ，満場一致をもつて議案第1，2号が承認された．引続き先に行われた選挙の開票が終わり選挙管理委員より候補はいずれも絶対多数で当選された旨報告された．ここで会長，副会長，専務理事，常務理事を互選するため臨時理事会が開催され，会長に久松敬弘君（留任），副会長に森一美君（留任），山本全作君（新任），木下　亨君（新任），専務理事に木下　亨君（再任），常務理事に三井太佶君（留任）が互選され，通常総会が終了した．

名誉会員推挙式　新名誉会員に次の4氏が推挙された．

石原重利君　新日本製鉄(株)常任顧問
井上道雄君　名古屋大学名誉教授
盛　利貞君　京都大学名誉教授，鉄鋼短期大学学長
Merton C. Flemings 君　マサチューセッツ工科大学教授

表彰式　続いて表彰式に移り，下記のとおり各賞が受与された．

渡辺義介賞　八木　靖浩君
西山賞　田村　今男君
服部賞　玉本　茂君　濤崎　忍君
香村賞　野口　祐正君　堀江　重榮君
渡辺三郎賞　新井　宏一君
野呂賞　川合　保治君　針間矢宣一君　渡辺　十郎君

俵論文賞

岸　輝雄君	大山　英人君	金　教漢君
山岡　秀行君	佐藤　廣士君	下郡　一利君
西本　英敏君	三木　賢二君	池田　貢基君
岩井　正敏君	堺　裕彦君	野村　伸吾君
栗林　一彦君	堀内　良君	萬谷　志郎君
井口　泰孝君	山本　誠司君	

渡辺義介記念賞

飯塚　元彦君	大西　稔泰君	釘宮　肇君
久保田正郎君	斎藤　達君	渋谷　庄平君
田桐　浩一君	立花　宏君	平岡　昇君
平松　裕更君	平山　満男君	藤原　俊朗君
丸岡　芳樹君	毛利　良一君	山鹿　素雄君

西山記念賞

榎並　禎一君	大森　靖也君	川原　正言君
川和　高穂君	小林　三郎君	権藤　永君
佐久間健人君	谷　餘士雄君	西島　敏君
正岡　功君	三塚　正志君	水野　博司君
森田　有彦君	山川　宏二君	和田　要君

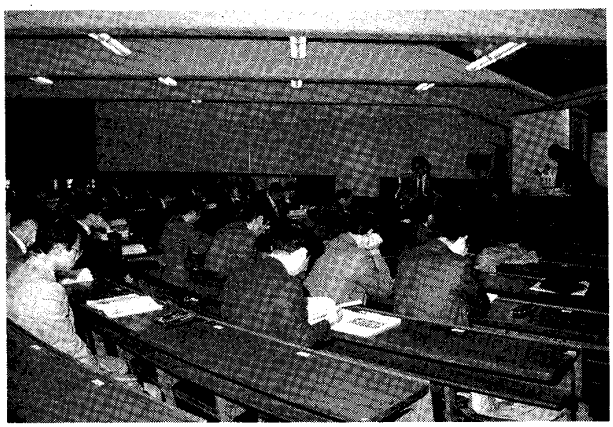
特別講演会　表彰式につづいて次の特別講演が行われた．

1.「わが国鉄鋼業のめざす技術課題」
渡辺義介賞受賞　八木靖浩君
2.「鋼の加工熱処理における基礎過程」
西山賞受賞　田村今男君

講演大会

講演大会は4月1日，2日，3日の3日間東京大学工学部ならびに法学部で開催された．

講演大会　講演数は製銑部門 116 件，製銑・製鋼共通部門 22 件，製鋼部門 150 件，加工・システム・利用技術部門 100 件，分析・表面処理部門 45 件，材料部門 189 件，萌芽・境界技術部門 97 件，計 733 件の研究が 17 会場にわかれ発表され，活発な討論がなされた．



第 113 回講演大会講演会場風景

討論会　今大会では一般講演の他，次の6テーマによる討論会が行われた．

1．高炉下部内現象　座長　須賀田正泰
2．転炉における精錬機能の拡大
座長　雀部　実，副座長　野崎　努
3．クラッド材の製造方法　座長　松下富春
4．二相ステンレス鋼の特徴と問題点
座長　諸石大司
5．缶用材料　座長　朝野秀次郎，副座長　乾　恒夫
6．金属材料の極微量分析
座長　岩田英夫，副座長　松村泰治

懇親会　懇親会は4月2日午後6時より千代田区一ツ橋の如水会館で開催された．雀部実理事司会のもと久松会長の挨拶，吉崎鴻造名誉会員（東洋鋼鈑(株)会長）のスピーチの後，佐野幸吉名誉会員の乾杯で始まり，参加者の間で歓談がくりひろげられた．参加者は 210 名であつた．

ジュニアパーティー　4月1日午後5時 40 分より東京大学山上会館で開催され，若手技術者，研究者を中心に懇談がなされ親交を深めた．参加者は 130 名であつた．